

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2023年度開講科目

(授業形態や教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

□必修科目

文学部 04230031 FLE-HU4201L1

堀江宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程) 2単位 A1+A2 金3 法文二号館1番大教室

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員を中心に、死生学の主なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践を取り上げる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

現在、スケジュール調整中である。昨年度のテーマを参考までに示す。

死生学とは何か

大学生の自殺防止

死生学と宗教

イスラム教における死生観

道教における死生観

ヨーロッパ文学から見る死生観

仏教美術における死生観：11・12世紀を中心に

近現代哲学における死と生

ケアの臨床死生学

死と生と蠟模型

〈反延命〉主義の諸相

長寿時代の臨床死生学

死の受容から生の受容へ

文学部 04230061 FLE-HU4204L1

鈴木晃仁、池澤優「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金3 法文二号館1番大教室

現在の人間の生活の急激な変化を幾つかの視点で分析する

第1回 4月7日 ガイダンス(鈴木晃仁) 応用倫理学概論について、授業と採点のメカニズムについて

第2回 4月14日 応用倫理I(鈴木晃仁)世界の倫理－世界と人間の歴史と倫理

- 第3回 4月21日 応用倫理Ⅱ（鈴木晃仁）身体の倫理－性の歴史と倫理
- 第4回 4月28日 応用倫理Ⅲ（鈴木晃仁）死と生の倫理－死体解剖と治験の歴史と倫理
- 第5回 5月19日 応用倫理Ⅳ（鈴木晃仁）医療の倫理－医療市場の歴史と倫理
- 第6回 5月26日 現代倫理Ⅰ（小島毅）人間の尊厳－東アジアの視点から
- 第7回 6月2日 臨床倫理（会田薫子）臨床倫理の理論と実践
- 第8回 6月9日 現代倫理Ⅱ（西村明）戦死後の倫理－遺骨処理の歴史と倫理
- 第9回 6月16日 環境倫理Ⅰ（福永真弓）ポスト自然時代の環境倫理
- 第10回 6月23日 環境倫理Ⅱ（福永真弓）気候正義と環境正義
- 第11回 6月30日 現代倫理Ⅲ（出口剛司）ポスト伝統社会における善き生
- 第12回 7月7日 世代間倫理（堀江宗正）サステイナビリティを問う
- 第13回 7月14日 まとめ（鈴木晃仁）応用倫理学のこれから 採点の説明

□選択必修科目

文学部 04230051 FLE-HU4203S1

早川正祐「死生学演習Ⅰ」（病いの語りをめぐる倫理） 2単位 S1+S2 水2 法文一号館
219教室

人間は、病いととも生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるといことは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手――身体・病い・倫理』＝Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics* を講読する（訳本でも可）ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがどのようなものであるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ（vulnerability）・傾聴・証言・苦しみ・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りをはらむネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会がはらむ閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

文学部 04230053 FLE-HU4203S2

鈴木晃仁「死生学演習 III」(患者の歴史と倫理 I) 2 単位 S1+S2 火 4 法文一号館 114 教室

患者の歴史と倫理に関する論文や一次資料を読んで議論する

文学部 04230081 FLE-HU4206S1

会田薫子「応用倫理演習 I」(質的研究法入門) 2 単位 S1+S2 火 5 法文一号館 215 教室

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、医学、保健学、看護学、社会学、心理学、教育学等の分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

文学部 04230082 FLE-HU4206S1

池澤優「応用倫理演習 II」(環境倫理文献講読) 2 単位 A1+A2 金 3 法文一号館 315 教室

いわゆる環境倫理と呼ばれる分野における文献を日本語で講読する演習。講義形式と演習形式を併用する。

本演習では今まで J. Miller, D. S. Yu, & P. van der Veer ed., Religion and Ecological Sustainability in China, M. Tucker & D. Williams ed., Buddhism and Ecology: the Interconnection of Dharma and Deed (2015 年度)、リン・ホワイト『機械と神—生態学的危機の歴史的根源』、ロデリック・ナッシュ『自然の権利』、アラン・ドレングソン、井上有一『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想』、ピーター・シンガー『動物の解放』、J.E. ラブロック『地球生命圏—ガイアの科学』、トマス・ベリー『パクス・ガイアへの道—地球と人間の新たな物語』(2016 年度)、ファン・ポッター『バイオエシックス—生存の科学』、アルド・レオポルド、『野生のうたが聞こえる』、岩崎茜『アルド・レオポルドの土地倫理—知的過程と感情的過程の融合としての自然保護思想』、石山徳子『米国先住民族と核廃棄物—環境正義をめぐる闘争』、ジョン・バスモア『自然に対する人間の責任』、鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』(2017 年度)、ウルリヒ・ベック『危険社会—新しい近代への道』、ベアード・キャリコット『地球の洞察—多文化時代の環境哲学』、ジェームス・スワン『自然のおし

え 自然の癒し—スピリチュアル・エコロジーの知恵』、桑子敏雄『生命と風景の哲学—「空間の履歴」から読み解く』(2018年度)、シュレーダー=フレチェット『環境の倫理』、R.D.ソレル『アッシジのフランチェスコと自然—自然環境に対する西洋キリスト教的態度の伝統と革新』、クレッカー&トゥヴォルシュカ『環境の倫理』、福永真弓『多声性の環境倫理—サケが生まれ帰る流域の正統性のゆくえ』(2019年度)、オット&ゴルケ『越境する環境倫理学—環境先進国ドイツの哲学的フロンティア』、フランク・ユケッター『ナチスと自然保護—景観美・アウトバーン・森林と狩猟』、尾崎和彦『ディープ・エコロジーの原郷—ノルウェーの環境思想』、石坂晋哉『現代インドの環境思想と環境運動—ガーンディー主義と〈つながりの政治〉』、真実一美『環境と開発—インド先住民族、もう一つの選択肢を求めて』(2020年度)、吉永明弘・寺本剛『環境倫理学』、徳永哲也『ベーシック生命・環境倫理学』『プラクティカル生命・環境倫理学』、加藤則芳『森の聖者—自然保護の父ジョン・ミューア』、ライト&カツツ『哲学は環境問題に使えるのか—環境プラグマティズムの挑戦』など、環境倫理に関する著名な著作を講読してきた。

本年度も継続して環境倫理の書を講読していく予定であるが、本年度のターゲットは人新世(anthropocene)、気候変動に定めたい。人新世という造語が作られたのは2000年であると言われる。既に人口に膾炙しているので、聞いたことがある人も多いと思うが、人間が地球の生態系を左右する決定的な要因になっていることを地質年代として表現した語彙である。しかし、人新世のメルクマールであるとされる気候変動、温室効果ガスの濃度上昇、海水面の上昇、生物種の絶滅などは2000年以前から言われていたことであるので、人新世という語ができたことで内容が変化したようには思われない。むしろ、その語は環境危機の切迫さ、地球規模であることのメタファーとして機能しているように思われる。

本演習においては、個々の環境思想家が人新世という語/イメージを通して具体的には何を主張しているのか、その主張の中でイメージはどのように機能しているかを明らかにしたいと考えている。

文学部 04230083 FLE-HU4206S2

鈴木晃仁「応用倫理演習 III」(患者の歴史と倫理 II) 2単位 A1+A2 火 4 法文一号館 210 教室

患者の歴史と倫理に関する論文や一次資料を読んで議論する

文学部 04230084 FLE-HU4206S1

堀江宗正「応用倫理演習IV」(環境思想研究) 2単位 A1+A2 月 3 法文一号館 210 教室

環境思想に関わる文献を読み、議論を深める。

文学部・人文社会系研究科の学生・院生が、自分自身の専門的研究を、環境という視点から捉え返すようになることを目標とする。

したがって、今は環境やエコロジーやサステナビリティに関心がないと思っている人も、積極的に参加して、視野を広げて行ってほしい。

□選択科目

文学部 04230041 FLE-HU4202L1

会田薫子「死生学特殊講義 I」（臨床死生学・倫理学の諸問題V） 2 単位 S1+S2 水 6
法文一号館 215 教室

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、研究者の発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実践家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

文学部 04230042 FLE-HU4202L1

会田薫子「死生学特殊講義 II」（臨床死生学・倫理学の諸問題VI）2 単位 A1+A2 水 6 法文
一号館 215 教室

S 期に続き A 期でも臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、研究者の発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実践家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

S 期は5回の研究会と各翌週にディスカッション授業を行う。研究会は Zoom で行い、オリエンテーションとディスカッション授業は対面で実施する (Zoom 参加も可)。ディスカッションの回は、履修者の小レポートの発表と参加者の討論を主体として進める。

2023 年度 S 学期の予定は以下のとおり。

- 4 月 12 日 オリエンテーション
- 4 月 19 日 守上佳樹先生、東よしき往診クリニック院長・KISA2 隊オヤカタ、「チーム KISA2 隊の軌跡と奇跡」
- 4 月 26 日 前回のテーマに関するディスカッション
- 5 月 10 日 石垣靖子先生、北海道医療大学名誉教授 (看護学)、「患者さんに寄り添うということ」(仮)
- 5 月 17 日 前回のテーマに関するディスカッション
- 5 月 24 日 清家理先生、立命館大学スポーツ健康科学部教授、MSW、「認知症の人と家族ケアのパラダイムシフト」(仮)
- 5 月 31 日 前回のテーマに関するディスカッション
- 6 月 7 日 赤穂理絵先生、東京女子医科大学医学部精神医学講座 准教授、「精神科リエゾンの視点からみたがん治療 — 患者・家族の言葉から見えるもの」
- 6 月 21 日 前回のテーマに関するディスカッション
- 6 月 28 日 小川義龍先生、小川綜合法律事務所所長・弁護士、「透析の見合わせと終了に関する法的視点」
- 7 月 5 日 前回のテーマに関するディスカッション

文学部 04230043 FLE-HU4202L1

会田薫子「死生学特殊講義 III」(臨床死生学特論) 2 単位 A1+A2 火 6 法文一号館 215 教室

臨床死生学と生命倫理・臨床倫理が交差する領域における諸課題の理解と思考力を養うことをめざす。

予定トピック：臨床死生学の射程、生命倫理と医療倫理と臨床倫理の異同、医療とケアの多職種協働、意思決定支援とカンファレンスの方法、臨床死生学の諸課題を一人ひとりの患者/利用者の視点から臨床倫理的に検討 (End-of-Life Care (EOLC) の諸問題、緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、延命医療の差し控えおよび終了に関わる問題、「尊厳死」・安楽死・医師による自殺ほう助、脳死、臓器移植など)

文学部 04230044 FLE-HU4202L1

早川正祐「死生学特殊講義 IV」(共感とケアの哲学) 2 単位 S1+S2 木 3 法文二号館

2 番大教室

臨床や教育、また日常の至る場面において、ケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、その内実は十分には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、現代倫理の鍵概念となった「ケア」について、その複雑さと困難さを尊重する仕方、批判的に考察していきたい。

より具体的には、英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理(Ethics of Care)においてケア、またそれらの概念と不可分な、ニーズ・応答責任 (responsibility)・脆弱性 (vulnerability)・依存性 (dependency)・受容性 (receptivity) といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を丁寧に見ていくことで、人間の傷つきやすさと依存性を根本に据えるケアの倫理が、主流の倫理学 (もちろん一枚岩ではないが) に対して、どのような独自の貢献をしようのかを考察したい。

文学部 04230045 FLE-HU4202L1

早川正祐「死生学特殊講義 V」(自律についての関係的なアプローチ: 現代行為論・自由論の一展開) 2単位 S1+S2 木4 法文二号館2番大教室

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」(relational autonomy) について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的な自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち、自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセス (shared decision-making process) に相応しいものへと発展させる。

文学部 04230046 FLE-HU4202L1

早川正祐「死生学特殊講義 VI」(認識をめぐる不正義と責任: 現代認識論の一展開) 2単位 A1+A2 水2 法文一号館112教室

2010年代以降、英語圏の認識論で盛んに論じられるようになった「認識をめぐる不正義」(epistemic injustice) の問題と、その不正義を是正する「認識をめぐる責任」(epistemic responsibility) の問題を考察する。そのことを通じて、「認知する」や「認識する」といった営みに否応なく孕まれている倫理的な次元を、その社会的な含意も踏

まえつつ、明らかにする。

哲学の分野においては、認識論と倫理学は別々の領域に属するものとししばしば「常に」ではないが——見なされてきた。しかしながら、私たちの具体的な生活の場面を考えてみると、多くの場合、倫理の問題は同時に認識の問題でもある。例えば、疾病・障がい・性別・性的指向等による差別、またレイシズム等においては、認識自体が、力関係によって媒介され、相対的に弱い立場に置かれた者は発言権を奪われ、沈黙を余儀なくされることがある。また勇気をもって窮状を訴えたとしても、それは正当な証言としては見なされず軽視されるかもしれない（「証言をめぐる不正義」）。さらに言えば、そもそも、当事者の苦境にたいして、周囲の人々の関心が低いいため、その苦境を表現する言葉が開発されず、その結果、本人はその苦境を訴える言葉自体を奪われているかもしれない（「解釈をめぐる不正義」）。

本講義では、まず主にフェミニスト認識論（ないし社会的認識論）による「認識をめぐる不正義」論の基本的な発想・概念を概観・検討する。その際、臨床の文脈において、その基本的発想・概念が、どう発展的に捉えられるのかにも触れたい。そのうえで、. そういった不正義に対して私たちはどのような責任を負っているのかも批判的に考察する。また私自身の認識的不正義論の展開として、「証言をめぐるタイミング」（testimonial timing）という概念を導入することで、共感知、認識的徳／悪徳また認識的不正義をタイミングの観点から考察したい。

文学部 04230047 FLE-HU4202L1

乗立雄輝「死生学特殊講義 VII」（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察） 2単位 A1+A2 水4 法文一号館314教室

死と生をめぐる諸問題に、偶然や確率という事象、概念、およびそれらにまつわる諸理論がどのような関わっているのか、もしくは、関わりうるのかを考察する。

各人にとって自身の生と死は一度きりの事象であり、いずれはみな死に至ることが確実と考えられるにもかかわらず、しかし、ある意味では、そうであるがゆえに、死と生をめぐる私たちの思考には、意識するか否かにかかわらず、確率や偶然（性）にまつわる思考が深く関わっている。

また、人間は、不慮の偶発的事態に起因する不具合や不幸を避けようと長年にわたって努力を積み重ね、その結果、ある程度の成果を挙げてきたが、そのことの副産物として、逆に合理的な思考ができなくなってしまったり、旧来の倫理規範や価値観がゆらぐ事態が現れつつある。

本講義では、生と死の問題について、偶然や確率をめぐる議論がどのようにかわるのかを、様々な哲学者たちの主張に注目しながら考察していくことを試みる。

文学部 04230048 FLE-HU4202L1

古荘真敬「死生学特殊講義 VIII」（死生をめぐる実存哲学の諸問題） 2 単位 S1+S2 金
5 法文一号館 312 教室

われわれが各自のかけがいのない「この身体」のもとに息づき、自身にとって一回的な生を他者たちと共に生き、年老いて、死んでいく、その多様な実存の様相と意味について、西洋哲学史上のさまざまなテキストを解釈しながら考えていく。扱われるテキストは、必ずしもいわゆる「実存哲学」に分類されるものとはかぎらないが、われわれの実存理解の精緻化をめざした解釈を試みていきたい。

文学部 04230049 FLE-HU2202L1

堀江宗正「死生学特殊講義 IX」（スピリチュアリティ研究） 2 単位 S1+S2 月 3 法文
一号館 214 教室

スピリチュアリティについては、哲学、宗教学、心理学、社会学など、様々な分野から研究が進んでおり、すでに膨大な文献がある。さらに、それは理論的、思想的な側面と、死生学などの臨床場面での応用の面と、ポピュラー文化の現象という面がある。今期はとくに現代的な現象を具体的に知り、それに関する歴史的背景や心理学・社会学による分析・解釈について学び、これらを全肯定も全否定もせず、冷静に議論する姿勢を養いたい。

文学部 04230050 FLE-HU2202L1

山田慎也「死生学特殊講義 X」（葬送儀礼の変容と死生観） 2 単位 A1+A2 水 2 法文一
号館 312 教室

死に際して行われる葬送儀礼は、人々の死生観とも密接に関連しており、死生学においても重要な課題である。個人化の進む現代においては、葬送儀礼は大きく変容しており、現代の死を考える上でもその動態を含めて総合的に捉えていく必要がある。この講義では、おもに民俗学的な視点から、近現代の日本の葬送儀礼について取り上げていきたい。その際には必要に応じて近代以前の歴史的変遷や、また地域的な多様性についても含めて捉えていくことで、日本における死の文化について検討していきたい。

文学部 04230071 FLE-HU4205L1

轟孝夫「応用倫理特殊講義 I」（技術時代の倫理——ハイデガー哲学の視点から） 2 単位
A1+A2 月 4 法文一号館 112 教室

本講義では、「存在への問い」で知られるドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの思索を手引きとして、現代技術の本質とはいかなるものなのか、またそうした技術によって規定された現代社会において可能な「倫理」とはいかなるものかについて考察する。

講義ではまず、ハイデガーの「存在への問い」の基本的内容を『存在と時間』から後期

に至るまでの時代的展開に即して概観する。その際、彼の哲学的思索がもつ政治性にとくに注目したい。

こうした「存在への問い」の概要の把握に立脚して、講義ではハイデガーの後期の思索における「技術への問い」を検討し、その倫理的・政治的含意を明らかにする。

以上の議論に基づいて、講義では最終的に今日「応用倫理」と呼ばれている営み一般の問題点と限界を浮き彫りにするとともに、今日われわれが技術に対していかなる態度を取りうるのかを考察していきたい。

文学部 04230072 FLE-HU4205L1

吉永明弘「応用倫理特殊講義 II」（都市の環境倫理） 2単位 S1+S2 月4 法文一号館 112 教室

環境倫理学の基本的な枠組みを知るとともに、「都市の環境倫理」の内容を理解することによって、環境問題と都市問題について倫理学の視点から考えることができるようになる。

文学部 04230073 FLE-HU4205L1

福永真弓「応用倫理特殊講義 III」（食と場所の環境倫理） 2単位 A1+A2 火4 法文一号館 311 教室

食とは、自然が生み出したものを人間の身体に取り入れる行為であり、身体という場は人と自然が関わる場でもある。また食は、食料を得て加工し食卓に並べるまでの過程も、食べるという行為自体も、きわめて文化的かつ社会的行為である。しかも、グローバルに広がる食の生産・消費・廃棄のシステムに支えられた現代の食において、わたしたちは見知らぬ他者が生きる場と生産・消費・廃棄のシステムを介してつながっている。本講義では、大気海洋システムまでも大きく人間活動に影響を受け、人為起源の生物系群に地球が覆われた人新世時代において、食システムがいかなる変容を求められ、実際に変容しつつあるかを追いかける。そして、よい食とは何かについて、おいしい、健康である、倫理的である、持続可能である、公正である、真正である、など「よさ」を表現する概念と実践をたどりながら考える。それは同時にわたしたちが生きる場所とは何かについて考えることでもある。本講義は二つの目標を設定する。一つは、現在の食システムを理解した上で、よい食とは何かを評価する軸をみずから見だし、実践する方法を探求することができることである。もう一つは、人新世時代において自然らしさ、人間的であるとは何かについて深く考察し、具体的な社会のデザインについて想像する力を得ることである。

文学部 04230074 FLE-HU4205L1

村上靖彦「応用倫理特殊講義 IV」（現象学的な質的研究の方法） 2単位 S2 集中 教室未定

現象学的な質的研究は、個別事象の運動を内側から分析するのに適した方法論である。その方法論の概要と実例を示して習熟することを目的とする。

文学部 04230075 FLE-HU4205L1

北條勝貴「応用倫理特殊講義 V」（歴史実践における口承／環境／叙述） 2単位 S1+S2 月5 法文一号館 214 教室

実証主義歴史学においては、文字で書かれた文献資料は不可欠の前提であり、考古学や民俗学など過去を扱う隣接諸科学との境界をもなしている。そうして伝統的な進歩史観においては、文字は農耕や都市などと並び、常に文明の指標のひとつとして数えられている。しかし、早く柳田国男が民俗学創出に際して批判したように、文字筆記には否応なく、権力と階層差の問題が内在している。また、かつてレヴィ＝ストロースが指摘し、ピエール・クラストルやジェームズ・C・スコットが立証してきたように、民族社会には文字忌避の心性が根強く広がっている。しかし、文字を拒否した、あるいは文字を喪失したとの伝承を持つ少数民族も、決して歴史の概念を持っていないわけではない。当然のことだが、口承の複雑な話型を駆使して過去を語る人びと、数百年にわたる系譜を正確に伝える人びとにとっては、文字は歴史実践の不可欠の要素ではありえないのである。さらに、保莉実が鋭く捉えたとおり、口頭による歴史語りや文字記述と比較して不正確であり、信頼に値しないとの判断は、西欧近代科学を至上の価値基準とする、偏ったものの見方に過ぎない。本講義では、これまで歴史学が文字に与えてきた特権性を相対化しつつ、日本を含む東部ユーラシアの古代、少数民族の社会、あるいは仏教や道教の思想世界を往還しながら、ヒトの歴史実践における文字の意義、〈文明〉なるものにおける文字の功罪について考えてゆく。具体的な事例には、ヒト至上主義を批判し、ジェンダー・フリーな社会を実現してゆくため、アンソロポセンや性差別に関する史資料を多くとりあげる予定である。

文学部 04230076 FLE-HU4205L1

鈴木晃仁「応用倫理特殊講義 VI」（医療者の歴史と倫理） 2単位 A1+A2 金4 法文一号館 214 教室

古代・中世から現在までの医療者（医師や看護師など）の歴史と倫理を講義する

文学部 04230077 FLE-HU4205L1

福嶋揚「応用倫理特殊講義 VII」（破局のなかの希望～人新世の倫理・経済・宗教） 2単

位 A1+A2 水3 法文二号館3番大教室

今日のグローバル化した世界は、三重のカタストロフィに直面している。それは、第一に気候変動に象徴される地球生態系の崩壊、第二に貧困の拡大（貧富格差の極大化）、第三に世界規模の戦争である。

これらの混沌として複合的な事象の奥底を探っていくと、あくなき経済成長と軍事力の拡大を求めてやまない国民国家同士の覇権争いという根本的原因が見えてくる。この資本 - 国民 - 国家というシステムは19世紀に確立されたものだが、それが今や限界に達しつつあるのだ。

あるいはこのシステムを「軍産複合体」と言いかえてもよい。この複合体の原型は、実は遠い古代世界に現われた諸帝国においてすでに見出される。そして、そのような古代帝国の暴力的な支配に対する一種の対抗運動、いわば人間性の革命として、世界各地—中国、インド、中近東、ギリシャ—に現われたのが、今日にまで続く伝統的な宗教思想だった。哲学者ヤスパーズはそれを「枢軸時代」と名づけた。

けれども宗教は、その後に国教化して帝国宗教となると、もはや対抗運動ではなくなってしまう。とりわけ近代以降、北大西洋地域のキリスト教文明は、果てしない経済成長と覇権争いによって、生態系破壊に象徴される地球規模の危機の原因となった。西欧キリスト教文明は、今まさにそのようなグローバルサウスからの告発に直面している。

経済、宗教、道徳がからまりあった危機に直面する現代において、それらの垣根を超えるような大きな視座が必要となる。とりわけ軍事力とも金（マネー）の力とも異なった理念と実践こそが必要不可欠となる。そればかりか、既存の社会システムの崩壊、すなわち経済成長を続ける国民国家というシステムの終焉を予期しつつ、その先に地球生態系が共に生き延びる希望を描くという、きわめて困難な課題が待ち受けている。

この講義では、倫理学とキリスト教の研究者の視点から、以上のような複合的で越境的な問題にとりくむことにしたい。

文学部 04230078 FLE-HU4205L1

池澤優「応用倫理特殊講義VIII」（東アジアの死生学・応用倫理へ） 2単位 A1+A2 火3 法文二号館1番大教室

東アジアにおける死生学と応用倫理の歴史・現状・展望を概説する講義。

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科が死生学のプロジェクトを開始したのは2002年に遡る。文部科学省の21世紀COEプログラムに東京大学文学部が応募した「生命の文化・価値をめぐる〈死生学〉の構築」が採用され、2007年4月に始まるグローバルCOEプログラムにおいても「死生学の展開と組織化」として更新され、2012年3月まで十年間活動した。

また、全く同時期に、東京大学文学部では全学に向かって開かれた教育プログラムとして「応用倫理教育プログラム」を開始した。

死生学プロジェクト終了を前にした2011年4月、文学部では死生学プロジェクトと応用倫理教育プログラムを統合して「死生学・応用倫理センター」を創設した。更に2022年4月には人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中に「死生学応用倫理専門分野」を創設した。まだ大学院教育に限定されてはいるが、死生学プロジェクトと応用倫理教育プログラムが始まってちょうど二十年にして、制度的な基盤を獲得するに至ったわけである。

担当講師は2002年以来、死生学プロジェクトと応用倫理教育プログラムの両方に関係を持ってきた。死生学と応用倫理をめぐる東京大学文学部の活動を東アジアという文脈に位置づけて、その歴史的意義の回顧および展望を行いたい。

教育学部 09231402 FED-BT3103L1

大塚類「臨床教育現象学概論」(具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ) 2単位 S1+S2 木

5 赤門総合研究棟 A200 講義室

臨床現象学では、私たちが日常生活において体験するさまざまな出来事を「事例」として、現象学や哲学の観点から考察することを試みます。事例に基づく質的研究の一種だと言えるでしょう。

本講義では毎回、若者・家族・教育にまつわる個別具体的な事例を取り上げます。講義者が体験したり見聞きしたりした出来事だけではなく、マンガ、エッセイなども事例として取り上げる予定です(参考資料参照)。人間の普遍的な経験構造を明らかにしようとする学問である現象学には、「個別は普遍に通じる」という言葉があります。個別具体的な事例を深く考察できれば、「私にも思い当たる節がある」、「そういうこともありうるかもしれない」という形で、普遍的な人間理解へと繋がられるはずです。受講者のみなさんが、自分事として当事者性をもって臨めるような身近なトピックを、深く考察することを通して、みなさんの物事を見る観点や、自己/他者理解が深まることを目指します。

医学部 02246 FME-IH3e21L1

池田真理、キタ幸子、森崎真由美、山路野百合「家族と健康」 2単位 A1 月2 医学部3号館 3号館 1F N101 講義室

時代の変化とともに家族形態は変化し、さまざまな状況・諸問題に応じた援助が家族に必要となっている。さまざまな健康レベルの家族のヘルスニーズや、家族の健康問題によって発生する家族問題を理解し、本来の家族機能を高め、意思を尊重し、健康増進に向かうよう、家族看護の展開を理解する。

【到達目標】

1.さまざまな家族の健康問題によって発生する家族の課題と家族看護の必要性、意義について理解できる。

- 2.家族看護の基盤となる家族を捉える諸理論（家族発達理論・家族システム理論・家族ストレス対処理論、他）と、その実践への活用方法を理解できる。
- 3.家族看護の諸理論を説明できる。家族を単位としたアセスメントの方法を理解できる。
- 4.家族看護の展開方法としての家族看護過程を理解できる。
- 5.家族の発達段階に応じた健康問題を説明し、家族に対する援助の方向性を説明できる。

医学部 02218 FME-IH2d03L1

瀧本 禎之、中澤 栄輔、森 克美「生命・医療倫理Ⅰ」 2単位 A2 金1、金2 医学部3号館 S101

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。

本講義は、将来に臨床や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよい機会となる。

農学部 060500031 FAG-CC3C04L1

根本圭介「技術倫理」 1単位 A2 月5 農学部1号館 第8講義室

農学部 060500021 FAG-CC3C03L1

芳賀猛「生命倫理」 1単位 S1 月5 農学部1号館 第8講義室

我々は皆、他の「命」をいただいて、生かされている存在である。人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由で、ヒトや動物の命の扱い方が異なっている。本講義では、人の生命や死に関わる倫理上の問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな「生命」との関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として、多層な生命をどう秩序立てて理解し、どのように人類の幸福を追究すればよいかを、自身の専門分野とは異なる立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。

教養学部 08F1304 FAS-FA4D04L1

小松美彦「科学技術リテラシー論Ⅱ」（日本における優生学の歴史と現在——ポピュラーサ

イエンスと科学ジャーナリズムの視点から) 2単位 S1+S2 金4 オンラインのみ

新型出生前診断の普及、LGBTの人々を「生産性がない」とした政治家の発言、そして43名もの知的障害者が殺傷された相模原事件など、近年の日本では「優生学」(優生思想)の顕現とされがちな事態が数多く生じている。だが、そもそも優生学とは何か。そして、それはいかに歴史的に展開して今日に至っているのか。本講ではこうした問題意識のもとに、日本の明治期から現代までの優生学の歴史を考察する。

その際、日本の優生学史研究に新風を吹かせたテキスト(下記)を用いる。従来、優生学は科学か非科学かが問われてきたが、本書はその二元論を排して優生学を「ポピュラーサイエンス」(新聞・テレビ・雑誌などによって一般向けに発信された科学)と規定する。それゆえまた、優生学の流布と浸透において「科学ジャーナリズム」の果たした役割に着目する。かくて本講では、こうした観点から優生学の歴史を捉えなおすことになる。

視点を転ずると、以上は、“科学”の“啓蒙”と科学ジャーナリズム(メディア)との関係という、科学コミュニケーション論の主題のひとつにほかならない。この主題を歴史的に検討することもまた、本講の目的となる。

教養学部 08D1002 FAS-DA4B02L1

石原孝二「応用倫理学概論[科学技術論コース]」(応用倫理学の基礎と諸領域) 2単位 A1+A2 集中

教養学部 08F1003 FAS-FA4A03L1

石原孝二「応用倫理学概論[グローバル・エシックス]」(応用倫理学の基礎と諸領域) 2単位 A1+A2 集中

教養学部 08C131101 FAS-CA4E11L1

斎藤幸平「現代哲学特殊研究I(1)」(脱成長とは何か) 2単位 S1+S2 水2 駒場14号館 710室

気候危機が深まる中で、資本主義システムへのオルタナティブとして脱成長が注目を集めるようになってきている。本授業では、脱成長についての文献を読み、その思想的背景、歴史的変遷や具体的提案などを検討していく。